絲櫻春蝶綺縁 六

於
190
6

~13
190
6

於
190
6

絲櫻春蝶奇縁巻之六

東都　曲亭馬琴編述

第八段

䗲蝶丸進ぐ半晌を懲し
綱五郎暗に挾七を救ふ

赤縄の係る所ハ讐といふとも全聚ふ况て骨肉親戚の因果脱れぬ事を捨られ。助られざる世ミ田の介。芝崎寺の房とすなる。業中ほして十兵衛が悪棍織八を追ひ去りし。それより又太総を救ひて。本町へゐてゆきしより。第四の巻に既に演ぐ。暗ほ天文十八年夏六月の上浣十五日ハ。そのよさり太総と弟が宿所へ誘引ひとり挑燈引提つ。又忙しく芝崎なる業中へ走りゆきて。衣包を索る折両個の兇徒に切られ。首級取るゝまでゐりしが。大總ハ身ひとつへだとふ陣羽織を失ひて。生て良人獲ふ不環べきものかハ。死てハ親にあハすべき面なし。とうち歎けども人ハ

告べきよしなかりければ。ひそかに胸をぞ苦しめける。却説十兵衛は木嬰が事を。大綴が
素生その一件を尋ぬるに。大綴は曩に狭五郎が正なき所業より。わが身のうへさし
都ばつるなれば。旧里なる親のもとへ。明白に名告ては。義が立たじとおもひ(?)なりと
誰にもしらせず。三河の八十子崎より。水行を東へ赴くとて。風波の為に吹
ながされたれども。紀の浦なる木嬰尼に助られて。其の住方を索ん為。彼尼法師
なる共に鎌倉まで来て。聞くに父はなんや身まかりて。いまはよるべなき紀打尼も
又世を後れたりければ。いよいよ身の便著を失ひ。そが遺言に任して。終焉の枕を。
旧里人に告まゐらして。白骨を親族へ送らんやとて。鎌倉をさしてこそ来つる
よ。木嬰が行状は。言ふもさらなり物がたり。彼白骨と度牒帯をとり出で
見せければ。十兵衛は恭しく。件の三種を受とりて。尼の心操を嘆賞し。大綴が
薄命をあはれみ憐み。阿弐の女儈今殺されるならびて。一女子をとりよせらればならず

等閑におかんやとて。その胥大綴をおくりて母屋へ赴き。妹旦開に縁由のそが尾を
告ければ。旦開は頻に木嬰尼の貞実に慚愧して。大綴を叮嚀に勤り慰め。
夕餐果て客房へ臥簟を舗りて。其身も臥させ。裏襖を引たて。晩兄弟孤窓を
中にありく。綱五郎が棒を抑ち。當下十兵衛は曩に大綴が行状を悪提り(?)
奪はれたる為体を物がたり。又木嬰が遺言(?)を管称嘆しければ。旦開はいよいよ
身を羞て。彼尼御前は先主人に棄られたる女房なれども。綱五郎が為には実母なり。
加旃彼人が。一八(?)にまみれたる縁故は。吾儕に得ればいとかくも罪ふかし。
言ふるに木嬰尼終に臨て。後者なる女子は今宵の冥途(?)へのおもひなりしかりん。又彼
女子が眉目よろしからぬ(?)ぞかし。侍稀なり。綱五郎は總角より坊曹のまさを
嫌ひて。任侠を事として。三日と家にとるはなし。よりておもふに彼大綴を養ひて
吾儕が女児とし。綱五郎が妻となさば。一ツには木嬰尼に負たる罪を贖ふべく。二ツには

縁を命じ。大人しやうふのうなるべ。一八ねんへ背きさる。罪障此二八。然もせんの。ロ対ハ
いつよりこひもふと耳結べうそう兵衛の。こうつ化さるつのの夫叔姨の教則うく
女房とふ足袋を被るふ夫ほと結てほ。綱五郎どのいこの年永主人ふ夫ふ
者て算盤一ッ。ゆ夫ふ。こ〜の聞弾ゆしこの和袴と狂俳どるはたてくれて
物の滅とのこなれば。今いむ〜しの弟なるく祖ど親の遺を子ど笑ふこれも又世るの
勢ゆ。何るのも彼人の隨意いくいひも懲さどけふぞへ。ろ空よちん可ぐふ
所ふぐころるく。今ゆ。わもわぐ此彼のるふ程を同ぞ後ふ婚姻を整ゆんそねそへ
まづ抛ゆ。とふ旦開ハ兵衛ふ。その下どろあ良へ芸ろう大統を慈愛祝子の如く
しとりぐ大統も又旦開十兵衛ふ。等閑ゆ。ぐ慕ふまぞ。いつとるく女房と呼ぶ
母と唱へ小父と最ひと睦〜て日を送るね現十兵衛ハ大統ど為ふ外伯又ゆれ
ども。ゆ夫ふるとるけ旦ぐ送ふ。あねもとるく。旦開ハ実の母るふ別て

こゝよ十一年。女房ハ母を可ゆ縁えど。母ハ又年長で。面かろ巳隨ふ小草くとハ
ちひもやけどろも送る名を更て。舊里の車るどハ向ふハとるけれぐ。ろるよ
結てゆ〜といくゞも。骨肉の親ハ。ひとゆどて愛ふく。ろくどして情ふとる亦を
寿るうといひつぐ。ゆとろされ綱五郎ハ。その諸旦ゆ。ろよけ旦ぐ十兵衛旦開ハ
待ふけて。木要ゞる。大縁ゞ〜。ちらもるく。縁ろど。度牒腑帯をろ。ふ家番の
ひとろふ並ろる。白骨とさ一示せぐ。綱五郎ハ形を改め。ふぐ母の白骨を辞て。
さとぐふ猛さろる。涙坐ふ禁めゆど。某不幸中と七才の比世ふ別れる。
面影ハ定ふ恐ゞどゆとるつ。ゆくろのゞ。ゆ往方ろれどれば。索ねるふよ
ゆろれ。ろるふ今ろハ鎌倉ふ旦く。張藤一ゆひぐべなどてそふの音信
して。息の内ふ兵衛ふ。対面さ一ろハるつ。ゆつれろるゆ又ふ。世を悼の関ふ
ゆろけゆ。一ろる某ふゆるくゆ。ゆくゆぞふ。後の歎ふ絶ろさ一ゆふ。世るゆる

親よ抱いつゝ。やれ見捨つゝ注よけ見た。大總いものゞ身よつゝて苦よ袂を濡した
ゆゑ。旦角十兵衛ホハせあてのことをひして頼よ念仏しつゝ。やて綱五郎ハ
大總よ對ひて。某幸よ母の遺骨を迎ゆて。先堂よ葬ることを見ん身ゞ
賜ものゝ。便著ゐ人と咲く。さもゝ執持せゞとハ。只いつまでもたの処て
とつせろ」といひ慰め。千兵衛ホよ相彈て。母の白骨を芝崎道場ふ葬て石塔
婆を建ゝ。追薦の法慈を叮嚀よとろ扨ひ。喪よ籠てゐる程よ。秋ゝ擔乃
拘燈籠。干蘭盆もてゝ果しゝ。十兵衛ハ大總ゐる衆。綱五郎よ衆半。ゝふ
彼を妻ふ。て。ゐりち質氣よゐりゆ。と言ゝ衆揭して諭せども綱五郎ハうけ
引ゞ。親の蹟とハひゐゞらゝれ幸房よ帰ゐ。只ゝゞ憾ハ武士の子と生れゞ。
やゝ。ゝて一郷の餓鬼大将とハゝれど。五倫ゆゝてあれどゝ。圓塚山の山賊
ホもゝゞ里ハ面を弱ゞ。商人の子よるりの。商人を嫌ふと。家の不幸て

仰れども。実ハ一郷の幸ゐゝ。勇士ハ元を喪ふと衆忘ゞ。妻を娶り子を挙ゞ。
柱揺をゆけゝれて。志を果しゞ。姨ハ大總を艱女て。別よ壻を招ゆゝ。この
肆ハ長久ゐゝんゝゞゐりハゝち捨て。ゝゝとゆひ放てゝ。ゝけゝ家を
けゝ。旦角ハ複のゐゝゝふゝ。律のゝゝを竊ゝて忽地よ中衆失ひ。ゝゝや綱五郎ハ。
ゝゝゝ推辞とも。大總ゞ彼を慕ひゐゞ。竟ゝんゐゝゝゐゝゐゞ相彈てゝゞゝと
ゝひて。ゞて閑室よ振ゝゝ。綱五郎と婚縁を結ゝんとゝゝを密ゆゝふ説ゝゞ。
ゝゐゞゝゝゝれゞ大總ハゝゝゝゝを撞。ゝを不忠義の縁ゐりて。便著ゐ
ゝゝゝて。産育の親よ異ゐゝね。ゝん慈愛の海ゝと芝浦ゐゝゝ。ゝゐゝふ
ゝん宣ゝゝを。推辞ゞゝハ結ゝ移ゞ尼よゐゝゞき頼ひあり。髪さゝ剪て仏ゝりの
を。回善ものゝと酸鼻て。説諭せゞゐゝけゝゞ。男女の道ハ格別ゝて強て勧る
ゝものゝ移ゞ。此彼とゐゝのゝゞひゐゝて日を送ゝぬ。ゝゝよゝさ背横ゞ径

黒平は曩に鎌倉を追出されて三浦岬の浦曲を徘徊し。近ごろ武蔵の豊嶋へ
来て悪棍の大将軍となりしが。ひよくまゝよく我意にまかせて性急なること烈火の
ごとく。ひつるを一時に失ふまで。動もすれば言を殺す庭に人を撃倒して物を
取ることまたくなれば近郷の坊貫村翁預れて害物しらず人彼を綽号して半駒
と喚做す。又彼黒平が支黨なる悪棍に小馬栗織八と呼るゝは曩に天龍の
津にて。黒平に捐纒ありて津人に打扮て背月棋止双子を私にせし。その事発覚れ
ると忽よびちえやく逐電して。笘根の林麓に八九年の月日を送り。近属武蔵の
豊嶋へ来て。ふたゝび黒平に邂逅。おのれは行轎を舁ながら。ふたゝび彼が手に属て。
よろしからぬ所行を結び。ある日芝崎寺のほとりにて独りまよふ女子を引剥
せんとて。綱五郎が小父十兵衛によりて懲され。逃かへりて黒平に縁由を告しぞ。又
遽く舊の組へ走り出して叢中へ投入する行状をとぶんと也し。おれ又十兵衛ー

撞見て件の包を手に掠にと黒平は。織八が跡を追蒐来て件の衣を奪ひとり。
草に縣そて逃去りて奪ひとるもの織八なるに自極を裸にせし漢東の羽織て。
こゝに紛るところ管領家より浦々へ令さしあるに一文字の陣羽織なりし鎌倉へ
齎して賞銭をとらばやと思ふにより。その出処を闡すべし却て難義へ及ぶ要時
秘あれて。律の手を吟定め。その羽織に術ありと肚裏に思ひしから。織八は雖乃
物をとふして。その口紙相め。彼て人にゑんせざれども。織八が偸むとかりや。と支當し
ぐるみかゝりてそいつふせばしとその手に物も八月よりのしらべ生平に彼陣羽織を
夾衣の下に被て目くらも軀をおろそかにせぞ。それゆへわらで綱五郎は弱れをたなりけ。
強を挫き善を鳴し悪を懲せど比周して黨を結び彼黒平亦を目前よりん。
ようふねのといへども幸なるかな里を卒介に追ひも攘ひども是ろうな十兵衛が
物かくさりて諺く大猿が羽を奪ひしものは。彼半駒黒平欲さらばの縣計の

実根なるべ。折を以べ穿鑿せんとて。大絽の衣のさるどの紋。口嘴より同よりけれど。只なる紀笑ぶ像ゑんなる。衣とのを着てつたるゐ。ぜんぜんとぐるくて黙し。つ。有一日綱五郎い芝浦道場へ赴きて。母の墓まゐせしゆるさ。里人ホそりちびり里猶盡れの方よ當りて事あげよんしびそやまく往よとれい者面ゆ。一度高紀あ男一個の小厮を小腰より引つけ。いろく罵りつ引揚ゆけ。長則別人るゐ。驚く絽まる黒平あり。この小厮の主る商人黒平が袖よ捧りて。勸解まども聽ど。絆のあり。を側笑よ件の小厮庖丁へ水を灑んとて失て黒平ゆ法ざうゆ。忽地事のいで来ーん。俠者といつく綱五郎。さそぶこまをんコーやくくて主ここる老弱と左右へ引ひ紀つ。餓る猛虎の羊を驅求食まる鵰の狼を徊勢あり。と黒平ゆ。家よ主く推とゆ。ゆよ因くちづまりり。名を笑。面を緩まども。緩るのけまべけゆちども。打とけて物をえいいどこうれいい不町乃

綱五郎ん。己家よりく絆の紙を入りんゆ。ーーどいつ。敵ゆふえさるぬ小厮ちいども。みりとやけーん勿論彼ぶる笑るれども。勸解る外ゆ紙もを。綱五郎が面を觀く。放ーのんといつもあくど黒平ハ圓る。眼を睜り。声をふり立諺て名ふく。飜蝶丸ぐで邪王が挨拶で。輙く変と。猪もせんが。備和人がちて。落ーさる。放せ。とのられてい半晌が游俠ハ廢る。敵手よ足ゐぬ小厮うち。一足ゐの綱五郎。骨があぶもりーに。聽ゆといつ。ゆとする。と競ひやれべうち。微笑。何ともせねど物のひりのそうけ引まどとてそぶ隨よ。綱人中で逡巡ちてん。綱五郎もさ任俠ハ立ど。去腐ぶ勸解る。放ーそいるのせ不ぶく放さぬ。其外退ゆ。とんまる肩尖ゐを反まべ。小厮を捨て両三歩。さそ。出ーて足端駐め。肩間を手て内と巻丁と受とゆ。綱ん。とるを引つゆ。ゆこ。そうゆく黒平を。横ざゆよ。撩倒ーのゆ。やうて胸前を。蹂躙とるふ。綱五郎ハ。度足勿死。麻小腰を撲地と笑ーうば。

眼柳居士
辻相撲
ちくら鋼五郎

さと人
さと人
さと人
さと人
さと人
さと人
さと人
ちくら黒平
ちくらびハ

黒平猿て身を起して。呵々と冷笑ひ。半晌が威勢を見さうや。絆一ぐ元奴
るれども。時刻さえ北方の坊。和郎も些人よ者ふる。齷齪丸の綱五郎。小厮を
領けさの侍よ。且く左らも別且えぐ紙入をそく返せ。とさ一出と常ふ人ろうく。
ちろるぬと死なのひえ。絆てえもせぬ和主ぐ紙入ちろとろ。といへせも果ど。懐を推
ひ元。御よ小厮を引掴彼此とい間よ耳掴もせぬ四金十両紙入ひろ共失されべ。
疑ひ這奴よ係る。ちろぬといべ綱五郎。近せ一小厮をそく出せ。そく出せ。と
悪棍の金よ持ちとちろつも。争ひでうち良ぢ素ふ。ちよぬとるぐぐ。敲とるるべ
金の有元面ふ者ふ。めんど。ふ寡ハちれ。ち圓金十両賜ふて返しもせんぐつぐ
懐よ今ハ。一両目ぬべ元や。とのて黒平片煩ふち笑ど。翌とハ近さぬ半晌
黒平。一刻も待ちけまどひ。浄ぬ了得ハ俠奈些ハ容舎しそせん。翌の夜迫
よ侍とうゼ。そいいるくまでもあど。邪人駅裂命る中で。言を合せ一平ハ情ぬ。

證文ちうるの侍。始向物ちどいへとよ。そちあれ絆。ちろべけハ立別ちん。半晌
黒平。綱五郎。再てあうんと立ちうぶ王子の板よ疑ひの松ちうなくふ計目ち。憂
の塵芥とちち梯ひ。左左べ別且ちしべ。群集の老弱教動つ。件の小厮と
主ちち共よ。綱五郎を待つて。砂よ額を掘埋ゆ。ちくるふちさ斗るの子のちことびを。
いと叮嚀よ述よけり。却説綱五郎ハ途ちぐちろふゆ。ん黒平を踏んとせ一ふ。
暴よ隻足蠅麻一ハいとちるハ物ちどを。這奴懐ふちちるふちどゆつちく。ちべ
いるひ。山内の管領家一文字とのの陣羽織を索させもひふ元。扇谷ち管
領ハ。山内家の舅君あて八王寺の城よ坐せべ。婿君の馬ちもちる。彼陣羽織
と索ふ。ちのと。藤く伸く。ちるふ彼黒平ぐ夾衣の下ふ月刹姫衣を被ちし。
その塚世一ん元ちう元。彼一文字ふ。建長寺の什物ふ。ひとそ元りのしとそ。
半晌ぐ血ちて。隠て衣の下ふ被ちる。と且ち又ちぐちべ。又ハ絆ぐ奪れちる。

衣の色抜つぞ。ふ若ごと又の俵見このいふとよう旦も故ありげく。此彼ちひあへ
とるふ疑しくへ半晌黒平。おもあべ引拘。赤裸子て穿鑿せんとろろ一ツイ
ひ決て。一日二日と過と移よ黒平ハ次の月ろまちぐく石町の糸屋へいめるく。
件の金を債五ども。綱五郎ハ驚てろろ。ろろ。あれべ園宅のりのよちぐせどそ。
忙しくえろ出て。田屋の俵よ拒ひ。いひ寛ろ少せーどど。十兵衛旦閑もたや
ちりて傷痛くひひろ。そくして秋もたや。八月半のころよりつ九月十五日ち。芝
崎の道場ろ。然ちの神社の祭祀ろふ今茲ハ稲の穂るとくて。十二分の
出来秋ろんべ里の社客ホが。ちのく早稲をろ入ろ。録得の俵三十ありよ旦を
弦ちくや進ちん。物よりえて酒ち喫んとうち集合つ相撲ろるそぶ中ふこ三人
進出左の方とらりんとろ。例の弦ちるの祭祀ふ。勧進相撲ち奥約ろるんべ。今
たや習試を執ろ。殊よ今年ハ月もよ。辻相撲くを第一の最手接ひふ極る

ふの。この新米をそふちぐ。とりべ衆皆笑坪よ入り。ハ一張の獣物ひとちもろ
ちと。雷同。准俵ちんやせよとそ。ひと冒ーく罵ふぞ。黒平ぶ駁討ろる。小馬栗
微ハ子ち空て半晌よ若ーべそハ究竟のとふこそ。頻ハくと尼隅ろ。一人も殘さど
砂糊せそ。三十俵を物ちせんぞれ。続けどとりひそ。相撲の場ふまろ。ホれべ。ちすぐ両
三番ふハるぞど。そのとろ黒平ハ壮佐ホを見ろて。最手接ひふ極るの早稲駁微
らくと。ひくて。ちて。撲よ。ちわろ。ロれとろんのひのべ。ろ。ちとらひもあくど。衣を抜て
微ハ子遍ー。土俵の中へぞ跳ハる。その形勢。身長一岌高ー。て。肉堅ー。骨逞ー。肌膚
黒ーて。青墨を刷るぶどく。手足ま。熊毛間のく生て。金剛神のあれろ如。壮佐ホハ
これをうんて。送よ月を淫。袖を引ぬ。あくどもが。ぶ。ちとども。ハくよ。推薦ぐて。案字。山夜
鳥威。種井。黄代。連柳。ちど。停号せ。れてちがえあ。壮佐ちぐて。八九人。ちろく
名告ー。て。黒平と。挑ろう。脆くも負てろう。人ろ。ちなろるる。辻相撲ハ。ちひそ。張を

出しぬに額を拾て阿容々と逡巡するのさまなれバ黒平東西を見かへりて呵々と打
笑ひ。相撲の敵手へんやるゝ欲わいべきよと悦かさとどまる群衆と愈せバ黒平
青髯うん捋て又呵々とうち笑ひ。徹ハ自牢するにも及ずん其処に積しる
三十俵へ悉るぞる物ぞ由断して盗まるなどとく小馬栗うち兵衛近て名
ある臥石。置鉄。搗臼。岩手。井関ホでも親方するのひがさけん。牛を雇ひ車を
牽して彼物を運ましに。憩ひたるへとあらそ敵手を欲得と待りしに。浩処に綱五郎ハ。
今ぞ香芝済の壮夜ホが辻相撲さと聞て遠しく来る途にて黒平が云さへにきる
ものありしが。飛がごとくに走りきたりて。敵手をよび求めて。徐に土俵を下んと
する黒平を捨とめてぞ我に敵手にてあり。飜蝶丸の綱五郎とみづから名
告もあへず。衣服かぬぎて閃りて撥遣り。土俵の真中へ跳り入り。半胸と引組ぶり。
いづれもいつれの力士なれバ。手の舞足の踏ところ悉法に称ひて両虎食を争

如く。二龍の玉を欲するごとく。甲乙の手ござりて。須臾に衆人ハ汗を握り。の[?]くに二
見る程に綱五郎一声嘯て組る臂ありやとをき鼓てかゝる処左手へ外し。両三遍
撥して却き処をつと入りて。さしもの勇む黒平を目上るかと見さし揚て。やどる気を
かけて撞と投ければ半胸ハ筋斗を翻して。砂に半身擂埋し。見物も起ずりしが。
衆人咄と声を合して。飜蝶丸を誉る声揚々として鳴止ざりけり。程に綱五郎へ。
起んと蠢く黒平が背を撞と蹴躙ければ。半胸。飜蝶丸が威勢をおそれてや。
起ざる後を踹んとして。足の延停しに別に恢ありるべし。是ハ後にて来る
あり。没絶する人見かへりて。我所ありがたき。金十両来るとて。市町の廓
まで債にふえて叔婦小父に諫しられども。それいらざりき。三十俵の彼物を
彼十金を贖んとされども返さぞもよ物るれど。膂力に誇る汝が身ひとつ
三十俵を一度に肩にかけて去るべあらしましいかぞや。と責懲し。里人公する

件の俵を手あまりとり出して黒平が背の上へ。ぜりめて壁ふまし。呵くと
うち笑ひて脱捨る衣を取て。塵ゝ拂ひて舊のごく。帶引締び脱交の刀を
左手さゝ引拔て又黒平ふるう對ひ半晌米をもて去ぎやゝるどて起ざるをく起よと
いへば黒平苦げふさうなそい蹴據丸十俵壁ゝ並ねて。牛でも輙く起ぐゝ。
十両の金何のいせん放せゝと勸解るもいとゝ。小馬栗微八へおそるゝ。ゝ邪け
ども御ゝて。阿容ゝとそつゝのゝう。綱五郎八さもとと又黒平ようち對ひいかる
日ふるゝ足の延停るを精をるふ汝が衣の下ゝあゝうゝ。管領家ゝう索ゝ一文字の
羽織ゝ〳〵ぞやゝさるゝ〳〵べいかゝる比芝濱の道場のほとりゝ大盜ゝ奪ひとられる暴の
中ゝる衣ゝ中ゝ。赤裸ゝ中ゝ穿繋せんと強てゝうゝしふゝこゝをおひゝ〳〵ゝ
物怪の幸。汝ゝ衣ゝ何処ゝあゝゝやゝ〳〵ゝ入せよと責られて黒平ゝ逃んとするふ
ゝ動ゝ〳〵僅ゝ働ゝ眼を睜ゝ。屠所の羊の声ゝ聞ゝ。ゝよ微八ゝ何処ゝある。

ゝ衣をとりて走去れ蹴據丸ゝ立ゝ〳〵ゝ。といへて。ゝ小馬栗ゝ立ゝ〳〵ゝ。と
ゝ者もゝ〳〵半晌ゝ衣ゝ抱て。ゝ人を跳踰。ゝ走ゝ伝ゝ逃走ゝ綱五郎俵と
ゝ〳〵ゝ這奴ゝ支黨ゝ。ゝ迷ゝ〳〵ゝ隨ゝ脱ゝ〳〵ゝ。と嘗表裏て喘ゝ〳〵ゝ追
蒐ゝ。俵の騒擾ゝ衆人ゝ主ゝ〳〵ゝ半晌ゝ〳〵ゝ。俵を三ツ四ツ
反をとせば黒平ゝ逃ゝ〳〵ゝ。忽地ゝ身ゝ起。逃ゝ〳〵ゝ里人ゝ〳〵ゝ。慌
忙つ。左右ゝ〳〵ゝ。男衆ゝ排退敬伏。浴室の偷児追ゝ〳〵ゝ。赤裸ゝ頸長
を乱し。溝を越草ゝ躍ゝ。瞬間ゝ逃亡ゝ。ゝ綱五郎八ゝ逃ゝ微八を追
蒐て北を望て走ゝ。圓塚山の麓ゝ忽地ゝ所を失ひて。ゝ〳〵ゝ焦燥ゝ。
其外ゝ皇外ゝ。ゝ索ゝ打。藿葛園のゝ。捻林のゝ。ゝ年いとゝ。
一個の旅客兵士五七人ゝ。ゝ巻ゝ。ゝ難儀の体ゝ。腰刀ゝ
扱ゝ路ゝ。ゝ漸ゝ。ゝ綱五郎ゝ。ゝ〳〵ゝ。

狭五郎を
援んとて
綱五郎
追捕の
兵士を
とろうと
狭五郎

つる五郎

声をあらそふてゐる人は物いひん追捕の兵士は抑留せられてやくのごく難儀ふ
及ぶ。游侠とはこれをいふ。故ひるまとぬびりけり。綱五郎は今既に小馬宗
を追ひ失ひて。怒氣いきぐ納まらず。頭は焦燥おるるが彼が懲らの声を聴と斜一
き。蛇て刃を閃と抜きもんせど。臂ちうるる兵士をだうどんど砕倒へさ
刀ふ又一人ぶ細頸丁とうち落せば。残る兵士驚きあそれて嬉子をちらぶ次ごく
山路を登りて逃さうる。旅客はこの為体はこそもいふと呆れ果て。物をも
いはぬ小膝をつき。あを刀を引抜て肚を切らんとしるべ。綱五郎はこれを見ぶ。
忙しく推禁め。仇は既に此失るふ却自殺せんとるは狂人の所行ぶ似うるを
強めて下ぶう絆の仔細をきびしくとまぶく問て旅客は恨げに綱五郎を。
見やりつつ嘆息。この朝に及て緑田を。豈て盗るるぶ。なれ者の後ふまる人
あぶ。弦柄とも子のく何ら匿ん某は山内の管領家憲政ぬ一の近臣ぶ。神原

狭五郎と呼ぶ。ものと。放あるていぬる比。背摂とい老女を殺。生号せ。女
房の妹をあて。謙倉を逐電。擢さるるに別れる。世よるる乳母が舊里をも
あてに武蔵る。假名川へ赴ぶに。彼乳母ぶは早世。その良人微八といふ
りの罪あるて。十二三年前に。地方を追ぶて往方をぶ。今はその跡絶るは。
たゞめて嘆て忽地に憑む樹下に両は漏ぶども。隠笠ぶ命凶ぶれども人に人
鬼ぶ。里人ぶ好意ぶて。ぶに一月彼首に千日。物ぶ月日を送ぶんとて。額髪を
剃落。原狭七と名沢変て。百姓ぶ彼処にあるふ扇谷朝興ぬ一ぶ。
故主と同宗ぶて。晋秦の好をうーぶ。彼知ぶても穿鑿厳一ぶ。身を隠さ
べたよりもぶるのけ。人の由縁をもぶ。ぶるるも下徳ぶ。行徳をぶ。吾妹子
小糸を推乃つ。隠宅を去り去ぶの麓ぶ。扇谷家の追捕るぶ。兵士
五七人に抑留せられ。貴に小糸捕捕られ。難儀ぶるぶ。とぶども某彼ふ

傷けど一ト度び病口を脱して浦くを徘徊し。主君藤て索ゆ一文字乃羽織を
あさうてその形だろうも求めゐべ逐電せ一五一十。微臣ど孤忠を弱く。肚ろ切れ
とろよ友よ。和孩よ接と乞ひ〳〵の刃を合て兵士ホを砂敷さん為まあべ。ちろ不
和孩い猛く早りそ。彼徒を教せ一べ。ヨど罪意よ脱く路ゆく主よ怒る逆
徒とろうねさんべとて命を一さよ逃ゆんとうあいあくど。ふろ所以わるとるれど。
今へ〳〵もせんとべは。其如退ゆくと敦圃て力を拝て刀尖を肚へつ込ん焦燥
ども。綱五郎い此も放さど。ゆよ壮士つ〳〵徘の〳〵をゆく〳〵よ主の為よ人を教一。
已ぐ乞ゆうて女子を扨く逐電一。一文字とろ以衣を索て主君よ献ア。その
とろさそ潔白死んと乞ひ決一よ。いろく所道理ホ稱へ。早うて追捕の兵士を砂敷
せ一いとぶ過失いひとくよ辞ほ。ぢろともこの友よ和主よ肚を切一そい。接よあゆ
ぢ一ていま又和主を教とろう。嗚呼ぶは〳〵いろまんぶ。徘号ハ翻蝶丸字

綱五郎と喚ぶろ不町の糸屋ガ子るれども。稚くて親を喪ひ商人の不幸ハ
ゐせど。膂力ハ脛よりぞあり剣法巻法も好ホまして人るまあ習ひ弱て。
弱を助け強を折き。憑むといまて一ト度び。後途へ〳〵るとろの乞よ争和主を
教さべき。追捕の武士の崇とそ穿鑿せゐ〳〵とあゆべ解屍ハ綱五郎。名告りウて
生んのミ。和主が志るるゆあいべ。今又いろく一文字の陣羽織ゆ索ゆて
まわ〳〵べ。とぞろいで研一くも。ころ弱ぐ〳〵ろまん件の羽織をいふ
まそろ盗ゆて肌を放さど。下ホ彼終一癖者あり。ふれ大ろよ猜一つけよ
たろぐども侵りをゐく。〳〵抑んとそ追蕃一ゲ追失ひて〳〵ろども。忽地和主ろ
ゆうけれ。徘のこよ乃ぐるハ。ホ芸不ゆ藤の縁ゆ〳〵ども。今三十日綱五郎一ガ。
身ホ恙ゆくあるなるべ捕ま一彼女子も。故ひとろてゆらまべ一言ゆ
だろも侵べゆみ田の神も服覧あれ。身ハ天晋よ聲碎ま。死一てハ捺為よ

沈こんぬくても自殺ちやと誓ひをなして祝儀せべ挟五郎ろと〜公板
ちて感涙坐ふ拭ひあくど。又をおをう難よ納め。某假名川よあり」とえ。戻ず
和茂の名級ゆ〜ぐりふ夫ちに任侠ろり一文字の羽織ざふとり絡さしてあくべ。
小糸ぐのい紙ろよ足ふど。求めぐも彼女ぃ欲されて。ろ来ん義をうそせ
ざるい勇者よあくど。これも又和茂の為より背ちあべ。身ハ天晋よ餐碎ま
永切ろうむせあべうべと天地を祭して誓ひうべ。綱五郎大きよ飲び。ちべ
ひまも密山ふふ憑むべさ事あり。ちろ家ふい叔婦あり。又近ころ雑ひろる。
大絵とふ女子あり。姨の兄ひろともふ彼大絵をりて某よ妻せんとそ日糸ろう。
ちべく教唆せられども。釈の蹟とえいひるべ。坊賈の示為ぶ〜べ。況て妻子を
帯糸ちぶ。拝指をうけられてちべ隨よ世紙ちられ後。事よ托して推辞つけよ
ちべい祝ちてふけど追捕の武士を欺ろる。罪犯を身よ負べいちべ。余い憑れど

雖ちぶ。ちろ。ちべれ。叔婦とそべ兄とぜあて。ワが身のあ紀後よ店暖簾を
失ちべい後ち。人もよちべあり。既よ。ろ衣を絡べ。ちれと和茂ハ又ろ。
誓ひ言ちよ偽ちべ。彼大絵と妻ふて要時とも糸屋の廓を相続して
ありれと。他ちのくいべ狡五郎い悪ろ移て沈吟。誓ひを背ふあ〜移ども。
曝ち捕捕ちる。小糸ハ理ある女子ろ。彼ろ存亡を外ふて。妻を要んとい
ちろふど。加藤坊賈の示為ぶ絡べ。ちぬ某素ろ罪を主君よ得
られば。存命ふて。ちろ。他の家を受続べ。妻ふ連累ちるふ。あんこの
事のいハ辞ちのくとりせもあくど。ちち掉ひる後。ふで坊賈よ。ろ果
ちくとりふあるど。彼一女字敬ちろ復。和主ぶ世よ立とあべ姨大絵ふの縁よ
連ち。生涯を安くせん。正妻側室ハ人ちるあり。ちのちろふちひちちべよりべ言葉
ふ徒ふとえいけふろ身を置ところあり。ちくても誓ち背ちるや。こ理ちせあて祝

輸せば。狭五郎笑てうち点頭宜よ而至極せり。ろくべけよう舊乃名を。
ふろく匿て幸成るまでハ。飜蝶九ヶ義身ハ。田不町の狭七とぼまん迷よ
秘とべー。秘とべーと。帯めハて身を紀せば。俄頃よ此ゆる人音よ両人斉一
見かつて。砂ちぐされ追捕の兵士途よりとろて四せーるくん。盗るゝ罪を他ん
よろ。秀ゆゝ元祢原がらそゞ隨よ綱五郎も。樹間くをうち後ろ。先ゝよさち。
又後よろり。不町を投て伴ひね。

第九段

山寨よ投て黒平伍平太よ媚
酒樓ゝ秀て山魅綱五郎を賺

義をうんて勇を侠者ゝ。侠者ハ必利をりつゞ。只名をとゝんと欲るのゝ。
却説飜蝶九綱五郎ハ。通途狭五郎と。縛よくゝ合ゝ。不町の郭へ
ゐてかつ。旦間十兵衛ホよ對ひてゝ。其甲夜よ芝濱よ拉びく。おりつど

竹馬の友なれば。就てうくすくの物うろうとひろけて。外面どうんかうう。袴
ちらりさへとそ拾ひ入くふ。狭五郎いとろを引て。絆ものへと会釈つ。綱五郎が背後
ふ坐をゐ。十兵衛同日ゞ方ゞ居内そうゞ。ゞ額を着べ。豆腐十兵衛ホも
又遠〳〵礼を返〳〵。當下綱五郎小藤をとめ。阿蘇も姉巴もいさぐさ〳〵ぐや
をそをん。渠ハゆみ田の郎吉が子まそ。その名狭七とゆまとる。ちのが為ふハ習の
師を同せ〳〵友ざちなりそ。ちるふ渠も幸ゐ〳〵て年十二ゐり。比二親を喪
て上総ゐる親族ゞ頼ひそをん。小弓御所足利右兵衛佐義明上総の小弓ゞ
在城せり。ゐゞ小弓の所領と唱ふ。
の所内ゐる。某甲殿ゞ使まされど。所ふ曩ゞ相模ゐる氏保ぬ〳〵と会戦〳〵く。
下総の国府ふて聚まるへべ。そゞ家隷郎黨も。漸くふ離散〳〵て。狭七ゐ主ゞ乗ゞ
まり。身をあ〳〵所ゐる所ゞふ。此度故郷へゆくふけまど。又母ゐくゐりそ。既ゞ縣の年を
経ゐふ。親族もあゞざんべ。舊里ハ只名のみふて。ゆみ田へ立てもゐ旅へ。進退

ゐん〳〵難儀ゞ及ぶと呼てハいとゞ捨ゞて。頼てゐそゐりふれ。ゐゞ総角ゐりし
比。ゆ習子友ざち縣ゐりしゞ。この狭七とハ下とび。言葉さうひせ〳〵ゐもゐし
ゞざゐ廉直ふて。人ゐ絶て憤〳〵ゐのふもあざれど過世ゐ〳〵て左ゐ右
ゐも。只ゐひとりを引〳〵移〳〵ハ痛〳〵ゐとゐふゞや。と実〳〵ゐふてらあれば。狭七ハ
膝〳〵ゐ堂をつゐ降〳〵。月今ゐ日〳〵ゐ如〳〵。そのゐゞハ某ゞ年五ゐ六ゐ十〳〵
のへべゆ習ふ比のゐ〳〵ゐりそ。ゆみ田ゐ町ハ郷里ゐれども。総角の比上総へ赴ゐそ。
胡越のごくゐ〳〵ゐ〳〵小父公姨ゐ〳〵ゐ見ゐ。実ふけゞたゞめく。武家ゞはゐ〳〵く
坊賈ゐ経営ゐハ疎き某。物の孟ゐ主ゞとも。旦暮暖簾の掛卸。門の掃
除ゞ箒目の。足〳〵ゐ所ハ〳〵遍ゐ。ゞ〳〵ゐ徐〳〵てゐ〳〵せ。とハ〳〵ゐ豆腐ハ十兵衛と
渚ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ。宮ゐ人ハ氏〳〵ゐ。青武家のゐ〳〵ゐ物のいひゞゐ格別
ゐて男態さへ鄙ゐハゐゞ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ主ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ十兵衛ゐ。

正首に倉待つゝありけるが、簑梶のまつに夜随に年を経て、まての多屋にも
昔に似ず。小厮ひとりの使まで猶ぞ、莫逆竹馬の友だちとて主人が粗て末て
親み者を。ようや何せぬとひふとも誰ありかせくとゝべきにひつすでも是方に
けせなりしとさまへさまぐと辛抱よあるも。その後ハ身のくらとり。
的状ぐるありるか私べ否とひつても捨ていかで、入婿にあれ、養子にあれ、ぞ
まいて欲しとひふ人ハ、くだくもありふざれや。叮嚀に慰ねど、綱五郎ハ遠しく。
大総を呼びて對面させ、心くまよる主人態に。且男十兵衛ホハえひ隔ず、次乃
日より店にまじして、買賣のことなどを此彼とるし論つ、挨七を喚做けり。
現大総挨七ハ老ちせし。夫妻なれども、後に友ふで我を忘れ、彼を忘まてく。
彼荘周が夢に化しゝ蝶ハ妹侠の聘の小鞆ありがひるまも哀へ、案下某生
再説、半胴黒平ハ芝焼する辻相撲に辛く綱五郎に懲されて、剝嚢に奪
取る陣羽織のことをきゝれて、進退既に窮りね。小馬栗織八がのちつきなく。彼羽
織をもて売りしが、我身も安からず、脱まてとまつり回を緒まざに織八と共に
一旬あまりがりく潜びてゐたりけるに、又つぐとるよふらざれば、豊島へ来たりし
より、彼此の壮佼ホ大なる背くものありく。居つ食ふによあまりあれども。且
ともつけがくあつけ。綱五郎に撞見て、ハ終て勝をとるとゆるすにたで人眼聚る中
にて不覚をとりしのミならず、彼羽織のことさへに這奴に嗅つけられたれぞ、訴
らるゝことものあらん。公聴にもるぶざる間に、蝴蝶丸を緒果て、後安くとるにや
あらじとさゝやきあひつゝ、やゝ一計を生じ、一夕織八に酒肉を齎して
圓塚山に赴きける。この村円塚の山中に、山魅伍平太と喚れたる盗賊の首領あり。
某ハ京下総なる千葉の一族馬加が家隷なりし貪婪無欲の癖者なれバ、一夕
囲碁の勝負を挑て瑣細のあらそひ浄ひ、朋輩二人を砍殺し、三人に痍を負せ遂

雷して近國より多く猟師同来相求る癖有二三十人が首領となりて囚塚どて
寨を構へ近い麓を過る旅客殺却又後をこめて近々なる富家より入
て人を屠資財を掠奪恣に拳動ども世のとりんべ扇谷の管領彼を
征せるゆいとまなくして両三年をすぎれども山田の一郷へ蹴揉丸の郷
五郎壮仗ホを相潭て晴号を定め廐舎を湖煉さ賊を防ぐの進徒をさく
等閑なるべざるよ風声かくとなりしうべ伍平太こまを憚りて圓塚より東南
の里へ入ものなくなる紙なせば。さる程に黒平ハ微ハをなて潜やうに件のよ祈て
勤めてかづ齋さる酒肉を恭しく進めつ。伍平太に對面し某ハ世之崎おそさく
人まろぶれさる半晌黒平といふものこ彼此なる壮仗ホに推さて長ハうのうされども。
意に任せぬとなげう。頃ほ大王ハ一山に寨をなて威風近御まのれる。今
より麾下に属せん為推参てゆと態慇懃に演べ。伍平太ゆてゆく歓び。

いれも又芝崎よさるものありとい聞て突う。ありるホ参招ざとてこに来るよく
ゆぶさて稱へ。と爲へ。小賊ホに分付て酒肴を安排させ。黒平微ハを歓待
けるめくて盃の数かさるるて奥研まるの比黒平ハ壁に對ひて忽地嘆息し
たりしうべ。伍平太こまを怪て人盃に對ひてハ笑ひ楽さるものの。足下ハ何
笑の憂ものあ。彼ものこ。何ぞ又黒平ハ数回嘆息。某させる憂ことを
只大王の為に患ることあり。つらくこの席の光景をみるに富貴威力諸侯に劣
らぶものれども只一個の細五郎に憚りて山より東南へ下りのいどこの者に呉
ども嘆息てゆと小膝を拍て敵せば。伍平太羞て顔を撥てれ実に力足てねば芝崎
不町へ入ものけど足下と彼蹴揉丸といづれ勝り劣ぞと再て問ば黒平々
ゆを抗て額を拍大王とふ憚りのふに某いで彼に対なん。ものいへんと勇あるりの
智慮足ぶ。猛きものの歟易。某内まのて変を紛ひ。大王外ものに誘ひ。

黒平を
索て
綱五郎
酒楼より
誘引る
つな五郎
御料理

綱五郎を待搏ゆて。醢ゑるさんと堂を返さるゝ如。這奴ぞ結果るべかみ田
芝崎よりそるゝめるしそく〳〵ゑい起てゆく。と真実さらて勧まべ。伍平太ハ満面ゑ
溢るくだろうち笑てそハ究竟のるゆゑ。謀あらべ速ゑ。祝ゑしゆ〳〵と清のとむ
まべ。黒平ハ山魅と耳をさろめし。その粥汁ハ筒様〳〵如此〳〵と密往べ。伍平太限るく
飲びて又盃をうち巡し。半晌ゑ此ざろうの〳〵筋をそ〳〵せろべ。黒平ハ辞〳〵別れ微八を
ゐてその暁ゑ竊ゑ林鹿へ下りけゆ〳〵とハゑ。ぞ綱五郎ハ黒平微八を捕んとそ。昏に
彼此を徘徊ゑれども。絶て彼ホが所在ゑるんど。八月もいづゝゑそ。九月朔日ゑるゆ。
この日ハ東北をそろざして湯島のかゝ〳〵赴さろ。酒肴立さる母そろをゑふ酒保
忙〳〵ゑそろ出そ。綱五郎が袖をゝ引とめ。親方要時ゑちつの〳〵已為ゑうつゞ楼上
へそゆん身を移るゆゑ刀祢あり。そのづゝろるゑさへと誘ゑゆゑ。ゑろ〳〵ゑひるゆゑ伴ゑて
内ゑ入り。その人の名字を問て。酒保答てけゆんゆめての客るれべ某つゆ〳〵これを

ゑろべ。みづゝふ面をあゝ〳〵あつゞ分明るゆべ。とゝゑまゝべるゝ〳〵。ゆゑて楼上ゑ登ゑ。
武士の浪人と覚〳〵て年紀。三十五六ゆて月額延て熊毛の如〳〵皇元羽二重袴の
小袖を被て身のゞ丈賤かゝざるゆ忙〳〵出迎て。綱五郎を上坐ゑ推居ゑ。慇懃て
額を著。猛ゑ振れ来りし。ふ直ゑ駕と枕の全抜びこれまびのゑ。ゑちひらえて潭
ゆゝとのひつゝ頻ゑ掌を振べ。女の子二三人酒殽鰕りて来て主客の間ゑ安排つ。當下
件の浪人ハ恭〳〵盃を綱五郎ゑ推ゑめ。途中の歓待ゑろゑ任せどゑづ盃を挙ゆゝと
いゑゝもゑろゑるゑ〳〵。ゆれハ嘗ゑ扣ゑをゑゑ。今ゑ伊の衣ゆりゑ叮嚀ゑ郷貴ゆゑ名告ゑろ。
ゆゝり。とゝゝべ浪人ゑち微笑ゑ。哥ゑその仇侠をゑゑとゝ。渇ゑ〳〵年を累るゆゑ。
只縁ゆゝて発止せゝゑゝゑゝべもこの母ゑうを過ゑるゑふをゑんゑゆゝて理ゑるゆ漂化
せゝゑ。ゆゝべゆゝゑ若ゑ若ゑゑるべきゑゆゑづ盃を挙ゆゝとみづゝゑ立て勧まべ。綱五郎ゑと
掉。和ゑゑと素ゑゑ好ゑし。ゆゑゑその名沢ゑゑ〳〵ていゑゝべ酒食を貪ゑるきゑく推辞

ども許さば。四海みな兄弟なり。かれ好まずといふとも。高名を慕ふまゝにて今までの
爲義を表さるの。推辞るは其を疑ふのみや。と怨ずるに已ことを得ず盃をうけし。
両三度に及ぶ。浪人は酔に果る。女の子亦を退けし。さて後刀を見せつゝ。綱
五郎と膝つきあはし。我より名告らば縁しく。おのれも名告るに嗚呼なる
事なれど。某は圓塚なる山魅の伍平太なり。戦世の習俗とて良ぬ所行に山とり
して僅に露命を繋ぐといへども。義ある人を賊なさるのみにてこの年来山より
東南へは手をかけざるに。哥々の坐さる故にこそ某比日つく〴〵と身の分際を顧て支
黨三十餘人に過ぎず。一下さば管領より軍兵を向られなば尾のごとく砕なん。
名を東路にしられても哥々は室に游俠して弱を助け。強を挫き善にくみし。
悪を懲して人の爲に益あり。これは又壁を穿ち牆を踰。富を奪ひ貧を
剝とりて人に禍せざる事なし。つら〳〵思へば惑ひをとりてかゝる所行をしつけんと

悔しく思ふにも哥々の勇敢義気に恥ぢて。この故に小賊の衆に身の暇を
とらせ日頃のおこなひを山奥に捨て。むかしへ悔んとおもふ。是偏に哥々の威徳によるものの
なれば面あからむに赤心を告まゐらせんとて虎威を犯し。わりなく足をとゞめさしたり。
されども中途の一会いまだ歓びを竭さるに足ずとも。ねがはくは明日加馬を枉て。わが
隠宅に来臨あらば。野味といふとも村酒といふとも一碗を献酬して直に故郷へ
起行させ給へ。かくまでに懺悔することも。罪悪を悔しとおもふから。罪を贖ふ所に候はずば
索を被て管領へ将て去たまへ。怨はなしといひつゝ。両刀投遣て背へ左右の手を
おしまはして居たりけり。されば綱五郎つく〴〵と見て。窮鳥懐に入るときは獵師もこれを
殺さず。懺悔すれば五逆十悪の罪犯も滅すといへり。海野山を改めて。ワが里を開きなば
われ亦追捕の武士ならねども。國恩を以て載さざる。衆生拘て圓塚山を攘ひ
浄め。山賊の根を斷んと躊ひしが。既にその身の非を悔て遠くさらんといふ

の氏情きく捕んや。翌よ後ぶ山寨よ赴きぷん示餞別せん速よ起行の准備を
ちくそちち祝と殘餘一つ儲るる。山魅ぶ両刀をぶ〻撞ゐてさ〻せしうべ。伍平太斜
るぶ歎びて常ちち鳴し。女の子ホよ酒を帚ー。又殺を添さーちと吁嚀よ
歎結ぜべ。綱五郎いあくて辞ゼ。十二ふよ弥を渴て紙入の嚢ろ。円金一枚ぞ玉つ。
女の子ホよ投與るを。伍平太急よ推禁め。こいぶのをちりふぞけの東道ぞ
吾偏るるふりぐ〻大人の嚢中を費ぜん。枉てこまぶちめのくとりつせものぶど洛
笑ひ。れいこまぶ虞白の侠客るり。刃を拖て臭き紙忘まー。和主がいさく樓まてこれ。
殘ちりてそのくるる酒を喫りのよあぶど盃るれと歎いりんとうぞくゆるそこれを
俟翌亭午の比及よ必山よ登るべー。ぞろ弱ぞろあと窘て。衝牙を起ーく樓を
下ぞ。悠〻とーて出ぞ去ぶぞ。伍平太いこの形勢よ呆〻ー工平晌ぞろ。且羞且憤りて
齒を切り。ぞとやうもあぶあれ。這奴みづ〻ら高ぶりて伎倆の強よたやいろ。

ワが山よ来ぶんゆへ歩〻と生拘て。刃を剥指を障ー。法を死ーを責刳成ておひ
ちくとべ死りのをとちろよひとろ怠弱て。忙〻酒樓を出て圓塚ぞよたり
切ぶ半晌黙平ぷりる又山寨よ来ぶろ。伍平太を待てをろ。計策既よ就く。
聖綱五郎が来るりを。ぞる果ぞ太弱よ歎び。雖て山魅りちとるよ小賊手を
召聚綱五郎を待ぶせんとそ。ぞるその部分をちろりけ。

大東

絲櫻春蝶奇縁卷之六終